

鳥巢層群のKimmeridgian アンモナイト産出層から産する放散虫群集

石田 啓 祐 (徳島大・教養)

Radiolarian assemblage from the Kimmeridgian ammonite bearing formations of Torinosu Group in eastern Shikoku : Keisuke Ishida

四国の鳥巢層群に属する泥質岩からはアンモナイトが産し、それによる年代はジュラ紀中期末 (Callovian) から後期末 (Tithonian) に及ぶ (佐藤, 1974)。同時に、鳥巢層群からは、放散虫も検出されており、その群集による年代は、ジュラ紀中期末～後期末および白亜紀前期と考えられる (石田, 1988)。しかしながら、マクロ化石と放散虫化石の産出層準に関する詳細な検討は行われていない。

筆者は、四国秩父累帯のジュラー白亜系におけるマクロ化石と放散虫化石の共産関係に基づく年代層位学的検討を進めており、今回、徳島県那賀郡上那賀町栗坂の鳥巢層群栗坂層から検出した放散虫群集の種構成ならびに、アンモナイトとの層位学的関係について報告する。

鳥巢層群栗坂層は秩父累帯中帯に属しており、鳥巢層群のうち最も北側に位置している。栗坂からは、Kobayashi & Fukada (1947) によって、アンモナイトの *Ataxioceras kurisakense* が報告されている。模式地の栗坂では、礫混じりの砂泥質岩層に始まり、石灰質ノジュールを伴う泥岩層 (A, B, C₃) から平行ラミナの発達する砂岩泥岩の薄互層 (C₂)、ノジュールの多い砂混じりの泥質岩層 (C₁) を経て、塊状の硬砂岩層に至る10m足らずの連続層序が観察される。今回、C₁層準からはアンモナイトの *Ataxioceras kurisakense* が、またA～C₂の層準からは、以下の放散虫が検出された。
 優勢種 : *Archaeodictyomitra* aff. *pseudoscalaris*, *Pseudodictyomitra*(?) sp.D of Matsuoka, *Ristola dhimenaensis*, *Tricolocapsa* aff. *fusiformis*, *T. plicarum*, *T. conexa*, *Gongylothorax favosus*, *Stylocapsa*(?) *spiralis*。随伴種 : *Archaeodictyomitra rigida*, *Cinguloturris carpatica*, *Tricolocapsa tetragona*, *T. yaoi*, *Eucyrtidiellum* aff. *unumaense*。優勢種はA～C₂のいずれからも産し、層準のちがいによる群集変化は見られない。Matsuoka & Yao (1986) によれば、これらの優勢種は *Stylocapsa*(?) *spiralis* 群集帯に特徴的であり、とくに、優勢種各種のレンジが最も良く重複するのは、*S.*(?) *spiralis* 群集帯の上部であることから、年代的には、ジュラ紀後期のOxfordian後期とみなされる。このことは、直上位C₁から産する *A. kurisakense* の年代がKimmeridgian前期とされていること (佐藤, 1974) と矛盾しない。以上のことから、*Stylocapsa*(?) *spiralis* 群集帯の上部は、少なくともOxfordian上部に及んでいることになる。